

日本語方言終助詞の研究

著者	玉懸 元
号	18
学位授与番号	247
URL	http://hdl.handle.net/10097/37035

たま
玉

かけ
懸

げん
元

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 247 号
学位授与年月日	平成19年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期3年の課程) 言語科学専攻
学 位 論 文 題 目	日本語方言終助詞の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 小 林 隆 教 授 齋 藤 倫 明 教 授 才 田 い ず み 助教授 大 木 一 夫 助教授 甲 田 直 美

論 文 内 容 の 要 旨

第1章 本論文の目的と意義

第1章では、本論文の目的と意義とを述べた。

本論文の目的は、第一に、日本語における方言終助詞のいくつかを個別的に取り上げてその意味・用法を丹念に分析・記述することであり、それは、より詳しく言えば、

- (1) ある方言終助詞Fがあるとき、それがどのような用法を持つものであるか——つまり、どのような意味を(結果として)表わすために用いられ得るものであるか。また、そのような用法(用いられ方)を持つに足るような方言終助詞Fの個性(方言終助詞Fそのものの意味)とは、どのようなものであるか。さらに、その個性とそれぞれの用法とがどのようにして関連しているか。

といった問題を、当該方言の非母語話者にも分かるような形で解き明かすことであった。そして、本論文はまた、その第一の目的によって得られる成果を一つの土台とした発展的試論として、いくつかの方言終助詞(より広くは文末形式)について、その社会的属性から見た分布のあり方と当該終助詞(文末形式)の意味・用法のあり方とを関連付けた考察を試みるものでもあった。

方言終助詞を個別に取り上げてその意味・用法を丹念に分析・記述する「個別的方言終助詞研究」の意義については、次のようなことを述べた。

上記(1)の問題を当該方言を母語としない人にも分かるような形で解き明かす作業が多く研究者の手で積み重ねられることによって、共通語も含めて各地域方言において多様に分化していると見

られる日本語終助詞個々の意味・用法というものが具体的にどう多様であるのか——言い換えれば、日本語終助詞の意味・用法のあり方としてはどのような「^{パターン}類」があり得るのか——といったことが見えてくることになるだろう。そのような日本語終助詞の意味・用法のあり方に関する「類」が浮かび上がれば、それは、なお未知の日本語終助詞の意味・用法を分析・記述するに際して、有効な「分析的概念」となるはずである。

また、本論文が第一の目的によって得られる成果を土台として行なう試論——すなわち、いくつかの方言終助詞（より広くは文末形式）について、その社会的属性（世代差・男女差など）から見た分布のあり方と当該終助詞（文末形式）の意味・用法のあり方とを関連付けて考察すること——の意義としては、次のようなことを述べた。

本論文が第一の目的によって得られる成果を土台として行なう試論の意義は、「方言終助詞の静態的側面：第一の目的によって明らかにされる方言終助詞の意味・用法」と「方言終助詞の動態的側面：そのうち、本論文で試論的に着目するのは社会的属性から見た分布のあり方という側面」の両者を有機的に関連付けて考察することによって興味深い知見がもたらされる事例を具体的に示し、そのような方向性における方言研究の発展を促すものとなるであろうことである。

第2章 方言終助詞はどう取り上げられてきたか

第2章では、まず、これまでの方言研究において方言終助詞というものがどのように取り上げられてきたかを概観し、個々の方言終助詞の意味・用法に関する分析・記述の不足具合——つまり、(1)の問題に対して有益な答えを与え得る分析・記述にはなっていないこと——を具体的に見た。なお、ここで「これまでの方言研究」と言うのは、「個別的方言終助詞研究」を除く、次のような文献・資料における研究を指している。

- ・方言集・方言辞典
- ・各地域方言に関する（巨視的な）記述的研究論文
- ・網羅的・概略的な方言終助詞研究論文

続いて個別的方言終助詞研究の先駆として位置付けられる井上優(1995a)「方言終助詞の意味分析——山県砺波方言の『ヤ／マ』『チャ／ワ』——」『国立国語研究所報告110研究報告集16』において方言終助詞の意味・用法がどのように分析・記述されているかを見ることによって、本論文が目指すところの(1)の問題に答え得る方言終助詞研究というものがどのようなものであるかについて、その一例を見た。それは、その方言を母語としない者にも分かるような形で——言ってみれば、他方言話者がその方言終助詞を使おうとすればかなりの程度使いこなせるであろう形で——個々の方言終助詞の意味・用法に関する分析・記述がなされているものであった。そうであればこそ、我々の持つ(1)のような関心にとって重要な資料となり得るのであり、また、なお未知の日本語終助詞の意味・用法を分析・記述するに際して応用し得るものともなるのである。

第3章 方言終助詞をどう捉えるか

第3章では、本論文が第一の目的とする「方言終助詞の意味・用法の分析・記述」を行なうに際しての本論文なりの姿勢を論じた。具体的に論じたのは次の三点であった。

- ・文の意味と終助詞の意味(3.2節)

- ・終助詞の意味と用法、という術語(3.3節)
- ・終助詞の意味と用法、その直接的・間接的なかわり合い(3.4節)

以下、それぞれの節の要旨を述べる。

【3.2節 文の意味と終助詞の意味】

文の意味とはその文中の語それぞれが有する意味の総和である、といった素朴な意味観は、しばしば、次のような過ちをおかす。すなわち、

ある文(ここでは、ある終助詞をともなう文)において認められる意味のうち、出所の容易に明らかならざるもの(その文中のどの語に帰すべきか、が簡単には分からないもの)を、ただちに終助詞の意味として断じてしまう

という誤謬である。

しかし、文の意味というものは、その文中の語の意味が寄り集まって形成される、といったような単純なものではない。語が集まって語の列となり、その語列が文となる過程において実現するものとして位置付けなければならない意味がある。そのような、文の意味が実現する機構(メカニズム)に留意しなければ、本来その機構によって実現されたところの意味を安易に終助詞の意味としてしまうという、上述の過ちをおかす危険性がある。

【3.3節 終助詞の意味と用法、という術語】

終助詞というものの用いられ方は(実は終助詞にかぎったことではないが)、一般に多岐に渡る。それは、言い換えれば、終助詞というものは、さまざまな状況下でさまざまな意味 m1、m2、m3……を結果として(文全体として)実現する際に用いられるものである、ということである。

本論文において、ある終助詞の「用法」としていかなるものがあるかと問うとき、それは、その終助詞がどのような状況下でどのような意味 m1、m2、m3……を(その文全体で)実現する際に用いられるものであるかということを問うているに等しい。また、ある終助詞の「意味」とはいかなるものであるかと問うとき、それは、かような状況下においてかような意味 m1、m2、m3……を、その文全体をして実現せしむることに直接的・間接的に貢献するような、その終助詞の本質(これを「個性」と言い表すこともある)とはいかなるものであるかと問うているに等しいものである。

【3.4節 終助詞の意味と用法、その直接的・間接的なかわり合い】

我々は、終助詞の用法と意味との関係のあり方に関して、無反省のままに次のように前提しがちである。すなわち、ある終助詞のすべての用法において、その終助詞の意味が直接的にかかわっている、と。このことは、より一般化すれば、

- ① ある終助詞のすべての用法は、常に、その終助詞の意味を核として共有する形で広がっているものである。

といった幻想を我々は抱きがちである、と言い換えてもよい。このような前提のとり方は、必然的に、次のような分析の手法を採ることにつながっていく。

- ② ある終助詞の意味とは、常に、その終助詞の有するすべての用法に共通する何事かを見出す、という手法でもって明らかになるものである。

本論文では、以下③④として挙げる理由により、上記の①のような前提やそれに基づくところの②のような手法を採らない。

- ③ ②のような手法による分析の結果は、往々にして、抽象度のきわめて高いものになる。また、その抽象度の高さゆえに具体的な用例のあり方に関する予測力が低下し、母語話者の直感からもかけ離れたものになりがちである。
- ④ 終助詞の意味と用法というものの関係のあり方について、理論的な問題を離れて、その実際として、①のようなあり方をしているものとは必ずしも考えない。終助詞の有する用法には、その終助詞の本質的な意味と直接的にはかかわらず、しかし別の用法を介して間接的にはそれとかわわっている、といった関係をとるものが十分にあり得るものと想定する。

第4章 終助詞「ッチャ」をめぐる

第4章以降が各論にありた、第4章では、まず、仙台市方言の終助詞「ッチャ」を取り上げてその伝統的な用法を「対話用法 A」「対話用法 B」「独言用法」として整理して記述し、続いて、終助詞「ッチャ」そのものの意味および各々の用法間の関係といった点に関する考察を行なった(4.4節まで)。その後、昨今、終助詞「ッチャ」には少年層(高校生)世代を中心として新たな用法を生じ定着しつつあることを指摘し、その「新用法」と伝統的用法との関係に関する考察にも及び、それらを通して終助詞をはじめとする文末形式一般の研究における談話文法論的な視点の重要性を指摘した(4.5節)。

なお、この章は、終助詞「ッチャ」の伝統的用法とそれとは異なる少年層世代における新用法とを取り上げる点で動態的な観点を含んではいるものの、基本的には、本論文の第一の目的——すなわち、日本語における方言終助詞のいくつかを個別的に取り上げ、その意味・用法を丹念に分析・記述すること——に重心のかかった章であった。

以下、主たる節である4.4節および4.5節の要旨を述べる。

【4.4節 終助詞「ッチャ」の伝統的用法】

4.4節では、仙台市方言の終助詞「ッチャ」の用例を観察し、その用法を「対話用法 A」「対話用法 B」「独言用法」の三つに整理した。

- ① 終助詞「ッチャ」の対話用法 A: 終助詞「ッチャ」は、そもそも知っているはず・分かるはずの事柄 X を、今・この場においては忘れていた・気付いていない、ということが相手から看取された場合に、「X ャッチャ」という形式で使用される。
- ② 終助詞「ッチャ」の対話用法 B: 終助詞「ッチャ」は、相手のそもそも知っているはず・分かるはずの事柄 X を、後続させる発話内容にとっての土台になることとして取り上げる場合に、「X ャッチャ」という形式で使用される。
- ③ 終助詞「ッチャ」の独言用法: 対話用法 A を自己内対話的に拡張したもの。

また、この節では、さらに、それぞれの用法の関係を明らかにした。すなわち、③は①の自己内対話的な拡張として理解され、また①と②とは「当該の事柄 X が相手のそもそも知っていること・分かることのうちに含まれるはずだ」という話し手の捉え方を示す標識としての終助詞「ッチャ」が自然に使用され得る典型的な2ケースにおける一方ともう一方に位置する形で関係している、と考えることができるのであった。

【4.5節 終助詞「ッチャ」の新用法——文末形式と談話構造——】

4.5節では、次のようなことを述べた。

- ① 仙台市方言の終助詞「ツチャ」に生じた「新用法」は、相手の知る由もない事柄や分かるはずもない事柄について「ツチャ」を使うという点で、一見、従来の用法とは根本的に異なるものである。
- ② しかし、当該文内の要素ばかりにこだわらずに、その文外へと視野を広げるとき——すなわち談話文法論的な視点をとるとき——「対話用法 B」（従来の用法のうちの一つ）と「新用法」との共通性が浮かび上がってくる。すなわち、そのいずれの用法においても「当該発話の内容を土台とする内容を持つ発話を後続させる用意がある」という話し手のプランが示されるのである。
- ③ なお、このような新用法が生じた背景については、次のように考えた。すなわち「当該発話の内容を土台とする内容を持つ発話を後続させる用意がある」というプランを判然と示し得るならば、そこには「談話展開の制御」と呼ぶべき効果がある。これは、動的に展開する談話においては、きわめて有意義な効果である。
- ④ 「ツチャ」に限らず、京阪諸方言の「ヤンカ」・共通語の「じゃないか」といった文末形式に観察される「新用法」についてもまた、以上①～③と同様の考察が可能である。

上記②にまとめた通り、この節では、積極的に談話文法論的な視点をとることによって終助詞「ツチャ」の「新用法」と従来の用法との関係を明らかにした。また④に述べたとおり、その視点が「じゃないか」や「ヤンカ」の「新用法」にもまた妥当な位置付けを与え得るものであることを示した（「ツチャ」はともかく、「じゃないか」や「ヤンカ」に関しては少くない議論が行なわれてきた。しかし、そこで談話文法論的な視点が積極的にとられることはなかった。まさにそれゆえに、「新用法」に妥当な位置付けを与えられずにいたのである）。これらの事例は、終助詞をはじめとする文末形式一般の観察・分析における談話文法論的視点の有効性・重要性を示唆していると言って良いであろう。

第5章 終助詞「サ」をめぐって

第5章では、仙台市方言の終助詞「サ」を取り上げ、まず、次の点を明らかにした。

- ・終助詞「サ」の使用状況（5.2節）
- ・終助詞「サ」に対する意識（5.3節）
- ・終助詞「サ」の用法とその世代差・男女差（5.4節）

以上のようなことを明らかにした後、それらを踏まえて、終助詞「サ」が伝統的方言形である終助詞「ツチャ」と共通語の終助詞「さ」との混交によって生じた中間方言として位置付けられ得ることを指摘した（5.5節）。

この章は、本論文の第一の目的の成果として得られる事柄を土台とした発展的考察——すなわち、方言終助詞（より広くは文末形式）について、その社会的属性（世代差・男女差など）から見た分布のあり方と当該終助詞（文末形式）の意味・用法のあり方とを関連付けた考察——を試みることに重心のかかった章であった。以下に、そのような試論を实践した節である5.5節の要旨を述べる。

5.5節では、5.2節～5.4節において述べてきた調査結果を踏まえて、ある仮説を提示した。まず5.2節～5.4節において述べたことから、いくつかの点を抜粋して示す。

- (a) 仙台市方言の終助詞「サ」は、高年層話者においては、共通語として意識されている。一方、終助詞「ツチャ」はいわゆる方言として意識されている。
- (b) 仙台市方言における終助詞「サ」の用法は、共通語における終助詞「さ」とは異なる。少なくとも、まったく重なるものではない。
- (c) 高年層話者（特に女性）における終助詞「サ」の用法は、終助詞「ツチャ」のそれと同様である。

(d) それに対して、より若い世代では、従来の終助詞「サ」の用法に加えて共通語の終助詞「さ」の用法(放言用法)が浸透しつつある。

以上の点より、仙台市方言の終助詞「サ」と「ッチャ」とをめぐって、次のような仮説を提示した。

① 共通語の受容：第一次

現在の高年層話者(特に女性)は、共通語の終助詞「さ」を、もともと仙台市方言にあった終助詞「ッチャ」の用法に重ね合わせる形で取り入れた(a)(c)より)

② 共通語の変容

しかし、実際には、仙台市方言の終助詞「ッチャ」と共通語の終助詞「さ」の用法は、完全に重なるものではなかった。そのため、(b)の状況が生じた。また「花ダサ」のように、名詞と接続するに判定詞「ダ」を介するという統語的な特徴を仙台市方言の終助詞「サ」が持つことも、終助詞「ッチャ」と単純に置き換える形で共通語の終助詞「さ」を取り入れたことの結果と考えられる。

③ 共通語の受容：第二次

いったんそのような終助詞「サ」がほぼ定着したものの、現在では、さらなる共通語化の進展により、若年層・少年層話者においては、共通語の終助詞「さ」の用法(放言用法)も浸透しつつある(=(d)

仙台市方言の終助詞「サ」をめぐると、および、それと絡み合う終助詞「ッチャ」をめぐるとの問題は、

① 共通語化の過程における方言形の存命

② 共通語化の過程における中間方言(混交形式、ネオ方言)の生成

③ 気付かない方言

といった現代方言の動態にかかわる事象と深くかかわる興味深い問題である。具体的に言えば、終助詞「サ」と「ッチャ」の両者は、共通語化の著しい仙台市という地域にあって今なお根強く活発に用いられる方言形であることによって①の問題とかかわっていた。また、この両者は、前者が、明らかな伝統的方言形である後者を基盤として成立したものとして位置付けられ得ることによって②の問題ともかわっていた。さらに終助詞「サ」は、共通語における同形の終助詞「さ」と統語的特徴や意味・用法上の微において異なるものでありながら、一定の世代・性別において「共通語」として意識されているものがあることによって、③の問題とかかわっていたのであった。

第6章 準終助詞「べー」をめぐって

第6章では、仙台市方言の準終助詞「べー」を取り上げ、6.2節において「べー」の形態・統語的な特徴簡単にまとめた後、6.3節では「べー」の用法を整理して記述し、その全体像を示した。続いて6.4節では「べー」の2大用法のうち「志向用法」(従来の術語では、意志の「べー」)に属する用法群について、その法分化の論理を考察し、また6.5節では、「べー」の2大用法のもう一方「推量用法」に属する用法群について、同様の考察を行なった。6.6節では、6.3節に示した「べー」の用法の全体像の中に直ちには位置付け難い用法として確認要求用法と呼ぶべき用法があることを指摘し、それを「べー」の全体像の中に置付けた。また、その過程で、現代日本語文法の「モダリティ論」において頻繁に使用される「確認要求」という術語に関する批判的検討も行なった。最後に6.7節では、「べー」そのものの意味を考察し、そもそも何故「べー」の用法は「志向用法」と「推量用法」とに分かれるのか——従来の術語を用いれば、何「べー」の用法は「意志」と「推量」であるのか——を考察した。

なお、この章は、地理的分布／社会的属性(世代差・男女差など)から見た分布／史的変容のあり方

いった動態的観点を含まず、純粹に靜態的観点から「べー」の意味・用法について考察をめぐらした章であって、すなわち本論文の第一の目的をそのまま実践したものであった。

本題である6.3節～6.7節において述べてきたことをまとめておくと、次の通りである。

【6.3節 「べー」の用法の全体像】

「べー」の用法の全体像は、以下のように、まず志向用法と推量用法という2大別されるべき用法があり、前者の下位類型として勧誘・応諾・申し出・意志の4用法があり、後者の下位類型として単純推量・確認の2用法がある、という形で描き出すことができる。

【「べー」の用法の全体像】

I 志向用法

未だ現実化していない事柄を取り上げ、それを、今後に現実化を志向するところの事柄として述べる。

① 勧誘用法

自身と共にある行為をするよう相手を誘う。

② 応諾用法

相手の誘いに応じて共にそう行為することを表明する。

③ 申し出用法

自身の意志を相手に申し出て、相手の意向を伺う。

④ 意志用法

自身の意志を独白する。

II 推量用法

未だ現実との合致を確認していない事柄を取り上げ、それを、自身においてそう推し量られるところの事柄として述べる。

① 単純推量用法

自身において推し量られるところの事柄をただ述べ立てる。

② 確認用法

自身において推し量られるところの事柄を述べ、その当否を相手に確認する。

【6.4節 志向用法における用法分化の論理】

志向用法の下位類型に勧誘・応諾・申し出・意志という4用法があることの論理——角度を変えて言えば「べー」の用いられた文が勧誘表現文・応諾表現文・申し出表現文・意志表現文として実現することの論理——は、次のようなものである。すなわち、「未だ現実化していない事柄を取り上げ、それを、今後に現実化を志向するところの事柄として述べ」るとき、その事柄と聞き手とのかかわり方に関する相違——すなわち、聞き手がかかわることによって現実化される事柄であるか否か、またそのかかわり方として能動的な行為者といった役割を担うか否かといった相違——が作用し、場合によっては、そこに文脈的な条件も加わり、その結果、勧誘表現文・応諾表現文・申し出表現文・意志表現文という各々の表現性が実現されるのである。

【6.5節 推量用法における用法分化の論理】

推量用法の下位類型に単純推量・確認という2用法があることの論理——角度を変えて言えば「べー」

の用いられた文が単純推量表現文・確認表現文として実現することの論理——は、次のように描くことができる。すなわち、「未だ現実との合致を確認していない事柄を取り上げ、それを、自身においてそう推し量られるところの事柄として述べ」るとき、その事柄と聞き手とのかかわり方に関する相違——すなわち、現実と合致するか否かが聞き手にとって確認可能な事柄であるか否かに関する相違——が作用し、さらに対話というものの基本性質（協調的相互行為）までもがかかわって、単純推量表現文・確認表現文という各々の表現性が実現されるのである。

【6.6 節 確認要求用法の位置付け】

「ペー」の用例文をより広く見渡すと、6.3 節で整理した「ペー」の用法の全体像の中には位置付け難いものがあることに気付く。それは、ある事柄が現実と合致するものであるか否かを相手に（確認するのではなく）確認させることが話し手において意図された「ペー」の用例文である。本論文では、そのような「ペー」の用法を——話し手の意図が「相手に確認させる」ことにあるという点をもって——確認要求用法と呼んだ。

この確認要求用法とは、確認行為と確認要求行為とが有する行為完遂上の一致点（何事かについて自身が相手に確認するという行為が完遂されるためには、相手方による確認という一段落が存すること）を根拠として確認用法からきわめて方略的に成立する用法として位置付けられるものであった。

なお、この節では、現代日本語文法の「モダリティ研究」において頻繁に使用される「確認要求」という術語について批判的検討を行ない、それが、「確認」という行為の主体が話し手である場合（すなわち「確認要求」ではなく「確認」と言うべき場合）にまで用いられているという混乱を指摘した。

【6.7 節 「ペー」そのものの意味と、その用法分化の根源的論理】

そもそも何故、「ペー」の用法が志向用法と推量用法とに分かれるのだろうか。6.7 節では、「ペー」の多様な用法における根源的な分岐点について、その分岐の論理を考察した。

そのために、まずは、我々が言葉を用いてなす行為というものを、Searle による言語行為類型を叩き台として、次のように整理した。

I 言葉と世界との関係づけがなされない……………心内描出型

II 言葉と世界との関係づけがなされる

① 言葉を世界に一致させる……………世界描出型

② 世界を言葉に一致させる……………世界創造型

さて、「ペー」とは、そのものの意味としては、

「ペー」そのものが意味すること：当該の事柄が自身における非現実としての事柄である、ということ（〈非現実性標識〉）

を意味するものと考えられ、そのような「ペー」の用法が志向用法と推量用法とにまず2大別されることの論理——角度を変えて言えば、そのようなものでしかない「ペー」を用いて、志向表現をなし得、また推量表現をなし得ることの論理——は、以下のように描かれる。

無標性が高く、話しての意図する行為が指定されていないがために、「ペー」の用いられた文「X ペー」は、もっとも基本的な言語行為類型のいずれかに位置付けられ、あるときは世界描出型の言語行為をなすものとして、またあるときは世界創造型の言語行為をなすものとして位置付けられる。

ある事柄 X を言語によって描き出し、そこに、それが自身における〈非現実〉の事柄であると言い添えただけのものであるはずの「X ペー」という文が、ある場合には自身の志向を語るもの〈志向表現〉にな

り得、またある場合には推量を語るもの(推量表現)になり得るのは、その無標性の高さゆえ、あるときは世界描出型の言語行為として、またあるときは世界創造型の言語行為として位置付けられ得ることの帰結なのである。

〈非現実性標識〉としての「べー」の用いられた「X べー」という文が世界描出型の言語行為をなすものとして位置付けられれば、それは「世界のあり方に合うように、自身における非現実の事柄 X を語ろうとする」ものであることになる。これは、とりもなおさず「自身においては世界のあり方が X であると思われる」ということの表現であり、すなわち推量の表現である——推量用法の成立。

また、それが世界創造型の言語行為をなすものとして位置付けられれば、「世界のあり方を X という非現実の事柄に合うようにあらしめようとする」ものであることになる。これは、とりもなおさず、その非現実の事柄を現実化しようとする志向の表現である——志向用法の成立。

以上によって、平叙文における「べー」の意味・用法に関して論ずるべきことはすべてに渡って論じ尽くしたはずである。

第7章 方言文末形式の使用実態とその背景

第7章では、まず、現在の仙台市の少年層話者における方言終助詞をはじめとする方言文末形式の使用実態——すなわち、現在どのような方言文末形式をなお活発に使用されていてどのような方言文末形式が衰退しつつあるか——を探った(7.2節)。続いて、そのようにして見出された実態の背景——何故そのような実態であるのか——について、第4章・第5章・第6章において明らかになった各方言終助詞の意味・用法のあり方を踏まえながら、考察を行なった(7.3節)。言うまでもなく、この章は、本論文の第一の目的の成果として得られる事柄を土台とする発展的試論に当たるものであった。

第7章の要点は、次の通りである。

この章では、仙台市の少年層話者119名を対象とするアンケート調査の結果に基づき、方言文末形式の現代における使用実態に関して、次のようなことを指摘した。

- ① 全般的に見て、少年層話者においては方言文末形式が使用されづらくなっている。しかしそのような中で、「べー」「ッチャ」「サ」等、なお根強く活発に使用され続けている方言文末形式もまた存在する。
- ② 特に敬語表現にかかわる性質を有する方言文末形式は、少年層話者において衰退傾向が著しい。その上で、このような実態の背景について、現代方言の位置(システムからスタイルへ)や第4章・第5章・第6章における考察によって明らかになった各方言形の性質といった観点から考察し、①②それぞれの背景について次のような考え方を提示した。
- ③ 現代の若年層・少年層話者の嗜好する意志疎通上の手法にとって高い有用性を有する方言文末形式は、全般的に方言文末形式の衰退傾向が認められる中にあっても、その有用性ゆえに、現在なお根強く活発に用いられている。
- ④ 現代の若年層さらには少年層の話者における方言は、旧来のそれとは異なり、一つのスタイルとしての位置を占めていて、専ら私的な場面において使用されるものである。私的な場面では、敬語表現の類の必要性が低い。したがって、現代の少年層話者においては、旧来の方言が有していた敬語表現にかかわる方言文末形式の使用頻度がきわめて低く、それらは衰退の途をたどっている。

ところで、言語の機能とはどのようなものであるかを考えるとき、そのもっとも重要な機能の一つとして、他者と意思疎通を行なう為の道具としての機能を認めない向きはないだろう。他者との意思疎通

を行なう為の道具であれば、ある言語形式の道具としての有用性は、当然、その言語形式の使用実態に対して少なからぬ影響を与えているものと考えられる。では、言語形式の道具としての有用性とは、どのようなことによって測られるのか。それは、その言語形式の意味的側面のあり方による。少なくとも、その側面が強くかわることは疑えない。

全般に共通語化の著しい地域にあって若年層・少年層の世代においては今なお根強く活発に用いられている方言形があるとき、そうした実態そのものは「共通語化の実態」といったテーマのもと、これまでの方言研究において明らかにされてきた。だが、その背景——つまり何故そのような実態であるのか——は、なお明らかにされてこなかった。少なくとも、その方言形の使用実態とその意味・用法のあり方とを積極的に関連付けて考察を行なおうとする研究はなされてこなかったようである。しかし、これは、言ってみれば不思議なことである。上に述べたように、ある言語形式の使用実態はその有用性に強く影響を受け、またその有用性はその言語形式の意味的側面に深いかかわりを持つと考えられるのだから。

今後、方言研究においては、ある方言形の意味・用法のあり方とその方言形の社会的属性から見た分布のあり方とを関連付けた検討がより盛んに行なわれるようになること——さらに延いて言えば、それぞれ別個のもののようにも思われがちであるところの、方言の諸側面を静態的に把握しようとする試みと方言の諸側面を動態的に把握しようとする試みとがより有機的な関係を持って発展していくこと——を期待し、また自らもその発展に貢献していきたい。

第8章 本論文のまとめに

第8章では、本論文全体の成果と今後の課題とをやや大きな視野から整理した。

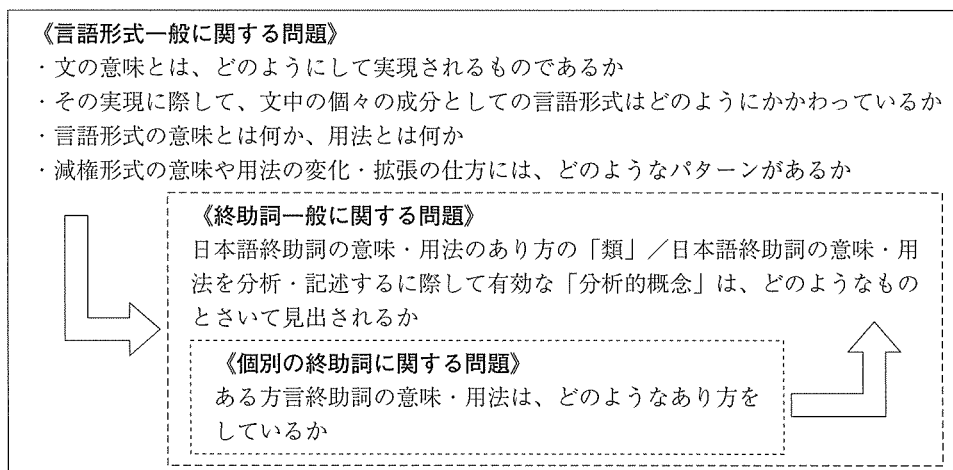
本論文の目的は、第一に、日本語における方言終助詞のいくつかを個別的に取り上げその意味・用法を丹念に分析・記述することであった。本論文の第4章・第5章・第6章では、宮城県仙台市方言の終助詞「ツチャ」「サ」および準終助詞「ベー」を取り上げその意味・用法を非母語話者にも分かるような形で解き明かすことに成功したものとする。

重要な将来的目標の一つであるところの「多様に分化している日本語終助詞の意味・用法のあり方について、その『^{パターン}類』を見出すこと」「未解明の日本語終助詞の意味・用法を分析・記述するに際して有効な『分析的概念』を見出すこと」に一步近づいたと言えようが、そのような目標達成の為には、いっそう多くの終助詞の意味・用法について分析・記述を積み重ねていかなければならない。

また、その際には「文の意味とは、どのようにして実現されるものであるか」「その実現に際して、文中の個々の成分としての言語形式はどのようにかかわっているか」「言語形式の意味とは何か、用法とは何か」「言語形式の意味や用法の変化・拡張の仕方には、どのようなパターンがあるか」といった、終助詞に限らず言語様式一般に関して問題となるべき事柄に関する検討をも迫られることになる。これまで、終助詞の意味・用法の分析・記述を目的としてこのような議論が明示的に行なわれたことはなかった。本論文では、第3章においてそのような意識に即した議論を行なった。だが、なお論ずべきことは多い。このような問題に関するいっそうの検討も、今後の重要な課題の一つである。

以上に述べたことを図示しておく、次の図1のようになる。

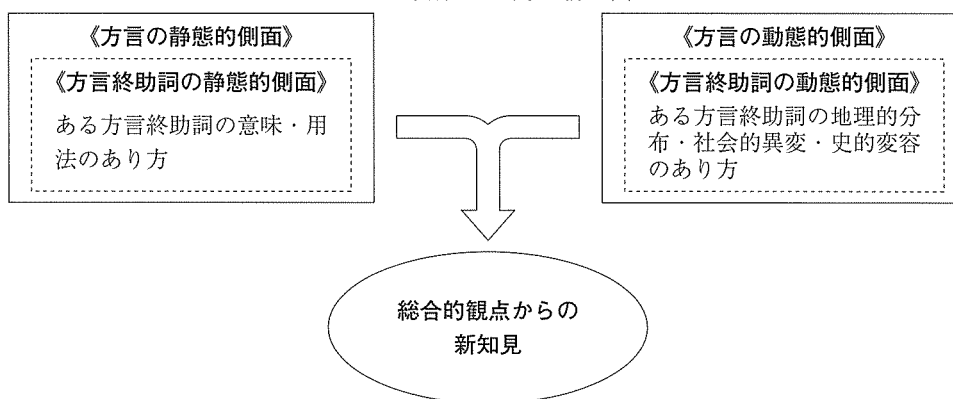
図1 本論文の成果と課題(1)



なお、この図ではいずれの矢印も一方向的にのみ記したが、今後の考察の実際は往復運動的なものなるはずである。たとえば「個別の終助詞に関する問題」を解決していくことは「終助詞一般に関する問題」を解決していくことに貢献するが、後者の問題が解決されていれば、いっそう前者の問題も解決されていくことになる。この意味では、この図中の矢印は、両方向に引かれるべきものである。

ところで、本論文は、方言終助詞（より広くは文末形式）について、その社会的属性から見た分布のあり方と当該終助詞（文末形式）の意味・用法のあり方とを関連付けた考察を試みるものでもあった。本論文では、第5章における終助詞「サ」および「ッチャ」に関する議論、さらに、第7章における方言終助詞をはじめとするより多くの方言文末形式に関する議論において、両者を関連付けて考察することで興味深い知見がもたらされる事例を示した。これによって、それぞれ別個のもののようにも思われがちであるところの「方言の諸側面を静態的に把握しようとする研究」と「方言の諸側面を動態的に把握しようとする研究」とが有機的な連携関係を有する方言研究というものの発展可能性を、具体的に示唆し得たものとする。以上のことを図示しておけば、次のようになる。

図2 本論文の成果と課題(2)



だが、とりわけ、方言の動態を明らかにするべく行なった調査の仕方・内容については第5章・第7章で具体的に自省したように、充実させるべき点が少なくない。また、第1章でも述べたように、方言の動態的側面としては、本論文で取り上げた社会的属性から見た分布（社会的変異）の他に、その地理的分布や史の変容のあり方といった側面も見逃せない側面としてある。このような側面と方言の静態的側面とを関連付けて考察を行なう方向もまた模索されるべきだろう。いずれも、今後に期すところの課題である。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本語方言における終助詞の意味・用法を記述することを目的としたものである。理論的な検討を経た上で、仙台市方言のいくつかの終助詞を具体例に取り上げ、記述の実践を試みている。また、それらの終助詞の意味・用法が世代的に変容していく実態と要因についても明らかにしている。

第1章から第3章までが総論にあたる。まず、第1章では、本論文の目的と意義について述べる。次の第2章では、これまでの方言研究において終助詞がどのように取り上げられてきたかを概観し、その問題点を指摘する。続く第3章では、本論文における考察の姿勢を示し、文の意味と終助詞の意味との関係や、終助詞の「意味」と「用法」という術語のあり方など、基本的な問題を論じる。

第4章以降が各論にあたる。第4章では、仙台市方言の終助詞「ッチャ」を取り上げ、その伝統的な用法を記述し、終助詞「ッチャ」そのものの意味および各々の用法間の関係について明らかにする。同時に、終助詞「ッチャ」には少年層世代を中心として新たな用法が生じ定着しつつあることを指摘し、その「新用法」と伝統的用法との関係に関する考察を行う。次の第5章では、仙台市方言の終助詞「サ」を取り上げ、その使用状況、使用意識、世代差・男女差について明らかにする。また、それらを踏まえ、終助詞「サ」が伝統的方言形である終助詞「ッチャ」と共通語の終助詞「さ」との混交によって生じた中間方言として位置付けられ得ることを指摘する。続く第6章では、仙台市方言の準終助詞「べー」を取り上げ記述する。各用法が分化する論理を考察するとともに、「確認要求用法」と呼ぶべき用法の存在と位置づけについて論じる。さらに第7章では、以上の発展的研究として、仙台市の少年層話者における方言終助詞の使用実態を探り、その背景に若い世代が志向する談話上の意思疎通の方法が存在することを明らかにする。

最後の第8章では本論文全体の成果をまとめ、今後の課題について整理する。

方言終助詞は、これまで方言辞書や地域の概説書の中で取り上げられる程度であり、本格的な記述研究はまだ日が浅い。そのような現状の中で、研究の基本的な立場や方法論について検討しながら、具体的な終助詞について綿密な記述を試みた点は高く評価される。本論文が、今後この分野の記述のモデルとして重要な位置を占めることはまちがいない。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。